

## 2018年度自己評価結果公表シート

### 本園の教育目標

キリスト教信仰に基づき、幼児一人ひとりを大切に親と子の育ちの場となるよう努めるものとする。  
(施設の目的及び運営方針)

第2条 この幼稚園は、幼稚園型認定こども園であって、「日本基督教団信仰告白」に言い表されたキリスト教信仰に基づき、学校教育法第22条及び第23条に基づき幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする。

2 本園は、社会の期待や願いに応えられる創意と活力のある保育活動をすすめ、園児・保護者・地域に信頼されるよう努めるものとする。

3 本園は、安心・安定した情緒と落ち着いた保育環境の中で、健やかで豊かな心と体が育つよう保育を行うものとする。

4 本園は、子育て支援と対話・相談を大切にし、親と子の育ちの場となるよう努めるものとする。

神様の守りと導きの中で、自らも子ども達から学び、共に生かされていることを喜び祈りをもって行う。子ども一人ひとりに対して丁寧に対応し成長を願う。縦割構成の保育には高度な配慮と保育者の資質が求められるので、保育が自己満足・マンネリ化に陥らぬように日々の実践を通して常に見直すように努める。

#### 1. 本園の保育の再確認

ア. 毎朝聖書を読み教育理念・方針、キリスト教に基づく保育について学び、園長を中心に教職員で話し合っって作成した「年間指導計画」に従って毎日祈りつつ保育を行った。保育計画も朝と保育後の教師会で教師全体で話し合い、子ども一人ひとりに配慮した保育計画を立て実践した。また、その月の願い・聖句などを全員で学ぶ時間をとり、共有し、それをもとに、各担当が月案を作成するという形をとったので、共通の願いのもと、保育にあたることが出来た。

また、子ども一人ひとりの育ちをより具体的に受け止め、多角的に知ろうという意図のもと、教師会とは別に、週に一度、個々の子どもの姿・育ちについて出し合い話し合う“のぞみ会”を持った。参加した全員の保育者が、それぞれに心をとめた子どもの姿・成長の気づき等を出し合い、保育者の子ども理解を広げ深めることとなった。また、週案での活動内容や子どもの動きなどをこの会で共有することができたので、次週の保育へも活かせることが出来た。

一方、今年度は幼稚園教育要領が改訂になり、5領域が細分化され「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10の項目が設けられた。これらは、当園でも、もとより、力を入れて取り組んでいるところであるが、一律に設定してそこに押し上げるためのものではなく、一人一人がその年齢をしっかりと生きることを通して、一人の人間として育つ基礎が大きく育つことを願って行っていることという捉えのもと、一人ひとりの成長の時を受容し大切にす保育を行った。

イ. 子どもも保育者もクラスの枠を越えた異年齢の幼児が生活する縦割・自由保育の中で、子ども一人ひとりに対して丁寧な対応ができた。また、子ども同士で問題解決出来るように保育者が必要に応じて間に入り、時間をかけて互いの心を大切に受け止めあうための話し合いの時を持った。全園児一人ひとりに対して、保育者全員で共通理解を持って子ども達にかかわった。子ども達は、互いに学び合い協力し合い競争し合い切磋琢磨しながら成長し合ったが、保育者はそれぞれの子どもの個性を受け止

め、生かせるよう、遊びの工夫や配慮を行った。また、各年齢ごとに体験することが好ましい活動も取り入れ、発達段階に応じた遊具や用具・素材・活動内容等の研究を絶えず行う必要がある。子どものみとりの学びは外部研修、書物による学びも行った。子どもの実態に応じた活動の取入れを、毎日のブログや各クラスのクラスだよりにて発信した。

- ・今年も満2歳児の認定外子どもを受け入れている。2歳児教育（保育）クローバーの部屋では、個人差が大きく、育ちの葛藤をくぐり抜けて自立の芽生えが育つ成長過程の子ども一人ひとりに対してより添った丁寧な保育が行われた。また、子どもたちの育ちや興味と鑑みた「ゆたかな活動」を中心にすえ、子ども一人ひとりの自己肯定感・友だちと一緒に心地よさの体感・遊ぶ力の育成に努めた。今年度は今までで最多の18名の保育であった。

ウ. 学期ごとに保護者会を行い、ご意見を聞かせていただいたり園の方針、行事について具体的に子どもの姿を通してご理解いただいた。

## 2. 園の施設、設備、遊具等の安全点検、施設設備の総点検

ア. 子ども達の成長に必要と思われる絵本等を購入した。外遊び時の日よけ対策として、テントを2台購入した。絵の具などの絵画製作の絵を乾燥させるための乾燥棚を購入した。卒園児の寄付として、ついでに（パテーション）を頂いた。

イ. 火災による避難訓練だけではなく、大規模地震を想定した訓練をした。また、大災害を想定し、保護者に迎えに来ていただく“引き取り訓練”を初めて行うことが出来た。

2階に全園児がいた時の避難訓練を計画したが、感染症流行の為、実施できなかった。

次年度への早急な課題である。

- ・避難用具として、防災シートを、又、2歳児の人数増加に伴い、避難車をもう一台購入した。

ウ. 運動的活動を取入れ運動力を高める方向で2階のホールの利用を考えていたが、年間を通じ、母の会の活動が行われる時があることと、夏期は冷房がないので、運動的活動としての使用は例年並みであった。しかし、年長児の絵画製作や聖書の学び、集まりなどでは、2階ホールを沢山利用し、有効な時間を過ごせた。また、自由遊びの中で、室内での遊びと屋外での遊びを子どもたちが自由に選択し、同じ時間内での中外遊びを、行うようにしたため、それぞれの子どものやりたい遊び・保育者が願った活動を、より自由に積極的に行うことが出来、一階ホールでの運動的活動（巧技台・跳び箱・トランポリン・マット・平均台などを使った運動遊び）を、日常的に行うことが出来た。同様に、大型積み木を存分に楽しみ、そのまま残し、翌日、続きをするという遊び方をしたかったが、スペースがなく、かなわなかった。

## 3. 子育て支援、家庭支援体制の再構築

子育て支援として行っている「こひつじ広場」を、昨年引き続き、教育的効果を考えて満1歳～2歳、2歳～就園前と2グループに分けて内容を充実させて保育を行ったので、その効果を大きく見ることができた。

#### 4. 保育者の質の向上、研修の充実

教師間の話し合い、研修会に積極的に出席し学んだことを伝達し取り組むようにした。今年度は、講師の先生を迎えての園内研修は出来なかったが、1のアにあるように、子どもの姿から学び合う“のぞみ会”と言う形の園内研修を行うことが出来、子ども理解を深め、保育に生かす事が出来た。副担任は昨年度に引き続き担任から自主的に学びながら、保育の在り方を自分のものにしつつある。

一方、教師のシフト勤務が日常的になる中で、全員が一緒に話し合うことが難しくなり、記録を残して共有するなどの工夫は行ったが、今後の課題である。

「キリスト教保育」の質の向上を図るために、今年度は、部屋の礼拝で、担任が、その月の聖書の話、子どもたちに語る事となった。戸惑いや不安もあったが、聖書を何度も読んで、聖書から学び、子どもの前で語り、子どもたちと聖書の世界を共有するゆたかな時間を過ごす事が出来た。

#### 5. 小学校との接続期の保育・幼小連携のあり方の再確認

卒園児が進学する小学校での幼保小連絡会に本園から必ず出席している。指導要録抄本を提出している。進学する小学校に入学する前に、園での姿や様子を観ていただく必要があると思われる園児に対しては、来園してもらい園長、主任、担任が面談し理解を深める機会をもった。

また、卒園後も小学校からの問い合わせに対して園長と卒園児の元担任が学校を訪問し、園での様子や本児に対する見方、対応をお話して理解を図った。